

幼児期から英語を学ばせる

ですから、日本人でも幼児期に外国語を耳にして育った者は、立派に外国語を聴き話す事が出来る訳です。その証拠に、仕事の関係で外国に一家を挙げて移住する家庭が多いやうですが、幼児は直に現地人と全く違はない立派な発音で原地の言葉を話すやうになります。さういふ訳で、21世紀の世界で活躍する為には自由に外国人と会話が出来るやう、幼児期に外国語を聴き話す学習をして置く必要がある、と私は考へます。

かう言ふと、「幼児期に外国に住んでその国の言葉を覚えても、帰国して2、3年も経てばすっかり忘れてしまうものである。だから、幼児期の外国語の学習は、その後も引続いて学習するのとなければ全く無意味である」と言って否定する人があります。然し、それは違ひます。言葉は永く使はないでゐると確かに忘れてしまひますが、外国語を正確に聴き分ける“耳”と外国語を話す“舌”とは決して失はれる事が無いのです。言葉はすっかり忘れてしまつても、再びその外国語に接した際にはその音声を正確に聴き分ける事が出来、又それを立派に発音する事も出来るものです。

私がかう考へるやうになつたのには訳があります。茅誠司先生(元東

大総長)から伺つた話ですが、「大学での教え子で、大学時代にはお世辞にも英語が達者だとは言へなかつたのに、アメリカで2、3年勤務して帰国した時には実に日本人離れした見事な英語を話すやうになってゐた男がゐた。それで不思議に思つてゐた所、彼は幼児期に、僅かではあつたがアメリカで暮した事があつたことが判つた。だから、彼は初めから英語を聴き話す力があつたのだが、日本人の英語の先生ではその能力が使はれず、従つて発揮されなかつた。それがアメリカに行き、本物の英語を耳にしたので、英語を聴き分ける能力が再び使はれ、その能力が発揚されたものであらう」といふ話に基くものです。

ですから、幼児期の英語の学習は、日本人の先生では無意味だと言つて良いでせう。どうしても本場の英語を、日本語に存在しない音韻の正確な発音を幼児に聴かせて、その音韻を正しく聴き分けられ、又それを正しく発音できるやうに導く事が必要です。幼児期のうちにこれだけの事をしてやらないと、社会人になっていくら英語の学習をしても“R”と“L”の聴き分けさへも出来ないでせう。

英語の学習に必要なのは“真似”と“反復”です。幸ひ幼児は皆真似も反復も大好きです。ですから、幼稚園・保育園では英語を学習させるべきです。英米人だからと言つて発音が立派だとは限らないから、私は発声機器に依る学習をお奨めします。